

子どもと幼児教育・保育をめぐる動きとこれからの課題 ～教育要領・保育指針改定の背景とねらいをめぐって～

白梅学園大学 短期大学 学長 汐見 稔幸

21世紀になって、子どもを育てるシステムが大きく変容し始めています。

子どもを育てるということは、カントによれば、自然的存在を理性化していくことです。別の言い方をすると、子どもの自然性の基礎の上に、その社会の基本文化を獲得させていくことだといえます。育てるということは子どもの文化化であり理性化です。

ところが、ここに来て、その文化の内容や存在の様態が大きく変容し始めています。

文化というのは、科学や宗教、学問、文学などの精神的に高尚な産物をさすこともありませんが、日常的には、人々が生活の向上のために創造してきた生活の仕方、行動様式、生活の知恵などを指します。広辞苑には「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」とあります。日頃の挨拶の仕方、遊び、食事の内容や作法、他者とのつきあい方、勉強の仕方、育て方等々がすべて基本文化といわれるものです。

子どもが育つあるいは子どもを育てるというのは、子どもにこうした文化をていねいに獲得させていくことと重なります。ところが、現代の生活では、隣近所の人との協働や挨拶などがなくなってきましたし、みんなで企んで外で遊ぶという文化もどんどん消滅しています。食事を作るために、素材を栽培したり採取して手に入れ、それを加工するという作業も必要でなくなり、買って来て温めるだけというものも増えてきました。寒さを防ぐ文化的工夫も、暑さをしのぐ文化的仕掛けも、特に必要ではなくなっています。文明の利器を使えば済むようになってきているのです。食べるためにまず飼育栽培をしなければならなかったときには、大人はもちろん、子どもも、動植物の育て方についての知識やワザを幼い頃から身につけるしか生きていくすべはありませんでしたが、そのとき、子どもたちは飼育栽培というかけがえのない文化を少しずつ身につけていたのです。そしてそういう文化を身につけさせていくことが、育児そのものであったのです。

世界の先進国といわれる国々では、今、文化の大きな変容によって、子どもの文化化ということの中身が変化してきて、どちらかというところ、やせ細ってきています。ワザとして身につけていく文化がどんどん消滅し、かわって文明が生活を支えるようになってきています。文明はそれを使いこなすのに、それほどの訓練が必要ないため、文明化としての生活が人間を育てる力をなくしつつあります。つまり、子どもがうまく育たなくなっているのです。

そのため、各国は今、子どもを育てるベースになる乳幼児期からの育て方とそのシステムを、時代にふさわしく発展させるように懸命の努力を始めています。どの国も乳幼児の教育・保育を自生に任せないで、制度化して、幼稚園や保育所で育てる部分を拡大してい

こうしているのです。しかもそのレベルを上げていくことも課題としています。そうしないと子どもの文化化がうまく進まないのです。

今後は、各国の幼児教育改革が具体的にどう進んでいるのかということ、そういう流れの中で、日本の幼児教育・保育がどう変わっていかねばならないのか、今回の改定はそのことをどう自覚し、日本の幼児教育と保育をどう発展させようとしているのかを考えていくことが重要でしょう。